

認知症になっても安心して暮らせる社会の実現には、家族の支えや医療と介護の連携、地域の理解が欠かせない。発症前と変わりにない生活を送るにはどのような支援が必要なのか。八戸市の80代男性の事例を基に対策を考える。

(渡部優)

認知症と向き合おう



みんなので支える

自宅で

「家が一番良い。60年も前から住んでいる場所だもの」。認知症を患う同市の置田一さん(88)＝仮名＝は満足そうに語る。

子どもはなく、同じく認知症を患った妻(85)は約6年前から市内のグループホームに入居しているため、自宅で一人暮らしをしている。

置田さんは認知症の症状がありながら、特に治療をしていなかった。だが約1年半前に尿が出にくくなると感染症になり、総合病院に入院した際、症状が顕著になった。環境が合わずに院内を徘徊したり、検査を急にキャンセルしたりして大声で怒って病院のスタッフともめ事を起こしたこともあった。入院治療が終わる前に自主的に退院したという。

関係構築

治療を終えずに退院して

医療連携に「下活用」

介護

ケアに当たると、次第に治療にも応じるようになってきた。看護師や周囲の人が困ったときには助けてくれる、ということをお願いし、アピールしていくことも、認知症の人を支える上で大切なことだという。

日常細かに

置田さんのケアで活用したのが、医療機関と介護施設の職員らがインターネットを通じて常に情報交換ができる医療介護連携サービスだ。医療や介護の関係者が登録し、各患者の情報をクラウド上のデータベース

「不安ない」

置田さんは現在、妻が入

に蓄積。同じ患者に関わる医師や看護師、介護士らがパソコンやタブレット端末を使ってリアルタイムで情報共有ができる仕組みになっている。

サービスでは、認知症ケアに関わるスタッフが疑問に思ったことを書き込んで相談する「認知症相談ルーム」も設けている。はちの

へ認知症疾患医療センターの専門医も含めた医師が直接、疑問に答えるという。置田さんのケースでも、訪問看護師らが血圧や体温、その日に話したことなどを、関係者だけが閲覧で

きる掲示板に事細かに書き込んだ。情報共有も役立ち、置田さんは認知症の薬物治療を受け入れて、1年半前より症状が落ち着いているという。現在も週2回の訪問看護を続けている。

情報共有、適切なケアに

「自分らしい生活を送ってほしい」と周囲に支えられながら、

八戸の男性 自分らしく生活



認知症があっても自宅で穏やかに暮らす置田一さん(仮名)。大好きな自宅の庭は、ほぼ毎日手入れしている